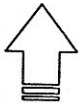
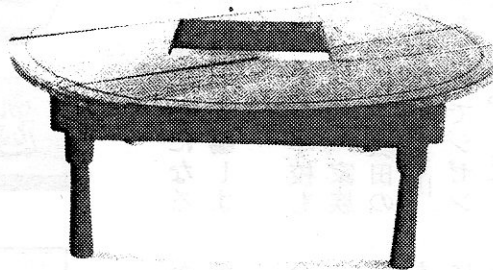
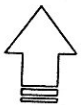
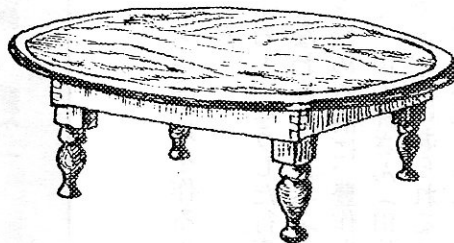


道具は語る 摂津市の昔の暮らし

ちょっと



○昭和時代によく使用された卓袱台です。中央に穴があいているのは、七輪を入れてすき焼きなどをするためです。



○円い卓袱台はやかましい席順のとりきめがないため、都市部でよく使用されました。



○江戸時代の蘭学者たちは、オランダ人を真似て阿蘭陀正月に卓袱台を使用して祝っていました。この図は大槻玄沢の家で行われた第1回の祝宴の図です。

『芝蘭堂新元会図』
早稲田大学図書館蔵

崎のオランダ人や中国人を通じてちやんと知っていました。当時の日本人が一つのテーブルを囲む食事風景に強い印象を受け、かつ興味を持っていた事は、オランダ料理をターフル、中国料理を卓袱(しっぽく)と呼んでいた事からも伺えます。

同じテーブルを囲むという事は平等な人間関係を前提としていますが、江戸時代は親子でも兄弟でも必ず上下関係がありました。したがって卓袱台を最も早く取り入れたのは封建的束縛が比較的になかった都市の労働者階級でした。

第6回
食卓
卓袱台
ちやぶだい

江戸時代までの日本人は銘々一人づつの膳で座って食事をしていました。そこへ明治になって西洋からテーブルが入ってきて、大勢で一つの食卓を取り囲む西洋のテーブルと座って使う日本の膳とが一緒になって生まれたのが卓袱台です。脚が折畳みになっていて、畳んで収納するという事は、布団に見られるような古くからの日本の伝統でありました。

明治になるまで、日本人がテーブルを知らなかったわけではなく、長

投稿欄「私にも一言」

音

横道

遊道

川へ「山行き」

源 勇一

昔の楽しかった行事の話になると、必ず「山行き」の話が登場します。

毎年四月十八日になると、学校も授業は二時間ぐらいで終えて、家族総出、村総出でジネン山（吹田の元の毎日放送や日生団地のある山、似禅寺という寺があるのでジゼン山が本当らしい）に出かけます。たいてい桜が終わってツツジが咲く頃です。途中の道もレンゲの花盛りで、みんな浮かれて出掛けます。山に登ると場所取りをして、重箱のゴツオ（ご馳走）を広げ、お酒を飲んだり、遊んだり、ワラビを摘んだりします。

日頃平地ばかりで暮らしている摂津の子にとっては、山や斜面というだけでも新鮮な体験で、坂をすべり降りたり、駆け上ったりして遊びます。

この「山行き」は、戦後も日本生命

が山を買い取って団地を作るまで続けられました。

民俗学によると、こうした行事は全国的におこなわれたようです。田んぼの仕事を始める前に、豊作を願う予祝として、田の神さん（田仕事を始めるまでは、山におられることになっている）と飲食を共にする行事です。今のお花見もここから来ています。でも元は、花は桜とは限らず、日ものいろいろだったようです。山行きは、山に近い安威川以北の行事です。ところが安威川以南でも、鶴野や古くは八町などで、ご馳走を持って安威川にでかけたという事です。そして、おもしろいことに、これ「山行き」というのです。「四月十八日は、今でも山行きてしています。」という人がいました。農地会の総会で、バスに乗ってホテルへ山行きするそうです。

お知らせ・秋の特別展示

平成十二年度・秋季企画展

百舌鳥・古市

門前古墳航空写真コレクションと

大王稜の埴輪―

【とき】平成十二年十月三日から

十二月三日まで

【ところ】大阪府立近つ飛鳥博物館

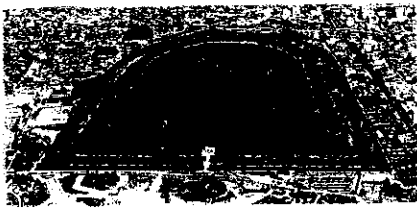
【休館日】毎週月曜日（ただし十月

九日は開館、十日は休館）

TEL（〇七二二）九三―八三二二

○近鉄あべの橋駅より長野線喜志駅下車、金剛バス喜志駅より、阪南ネオポリス行き終点下車

○文化財に対する航空写真撮影の先駆者である写真家・門前昇氏撮影の古墳航空写真のコレクションと出土した埴輪から百舌鳥古墳群・古市古墳群の大王稜を紹介します。



平成十二年度秋季特別展

卑弥呼の音楽会

ま・つ・り・の・ひ・び・き

【とき】平成十二年十月七日から

十二月三日まで

【ところ】大阪府立弥生文化博物館

【休館日】毎週月曜日（ただし十月

九日は開館、十日は休館）

TEL（〇七二五）四六―二二六二

○JR阪和線信太山駅下車徒歩七分・南海本線松ノ浜駅下車徒歩二十分

○人々が音楽をかなでる楽器によって、古代のまつりを考えようとするものです。また古墳に並べられた楽器を持つ埴輪や世界の民族楽器も同時に展示します。



郷土撰津いにしえ通信

鳥養の歴史

夫役と綱引助郷

江戸時代の農民には、米または現物や貨幣で納める税のほかに、労力を提供する夫役の負担がありました。戦国時代に、大名たちが軍事上の直接・間接の要員を多く必要としたため徴集しましたが、江戸時代に入っても、大名たちは幕府に対する軍役奉仕のために領内の農民に夫役を課して陣夫としました。また、軍事上だけでなく、普請その他の諸人足を村々から徴集しました。しかし、軍役的な夫

役負担は江戸初期にその必要が減じて、いちじるしく軽減されていきました。

これにつれて、夫役としての労役奉仕も、実際には夫米や夫銀の名で代納制が進んでいきました。芝村藩織田領では夫米と夫銀に分けて納めさせていますし、高槻藩永井領では夫代米の名で徴収していました。しかし、どうしても労力そのものが必要な場合、河川の普請人や助郷役など現実の労役も存じていました。助郷役は、江戸時代の夫役の中で最も大きな負担になっていました。幕府ははやくからその重要な交通政策として駅伝の制を確立し、諸街道に宿駅を定め、人馬を常備させて

公用人馬の継ぎたてにあたらせました。しかし、定数の人馬だけでは年々増大する交通の発達に應ずることができませんでしたので、これを助けるために宿駅付近の郷村から石高に応じて一定数の人馬を徴発する制度を設けました。

この課役を負担させられた郷村を助郷といい、課役そのものを助郷役または、たんに助郷と呼びました。

摂津市域の村々は駅所ではなく、または助郷でもありませんでした。しかし、これに変わるものとして、淀川筋の鳥養諸村には幕府御用の登り船の綱引人夫を無賃で差し出すことが課せられていました。これを綱引助郷と呼んでいました。

朝鮮通信使が大坂から京に行くのに淀川が使われ、この時も綱引助郷が徴集されました。朝鮮通信使とは、豊臣秀吉の朝鮮出兵を反省して徳川家康が、友好を回復するため、

朝鮮に一番近い対馬藩の宗氏を仲介にして、国交の回復を望んだことに始まります。これは鎖国体制下の徳川時代に、朝鮮半島や大陸の政情を知り、外来文化を、じかに摂取できる機会でしたから、幕府は接待に随分配慮しました。

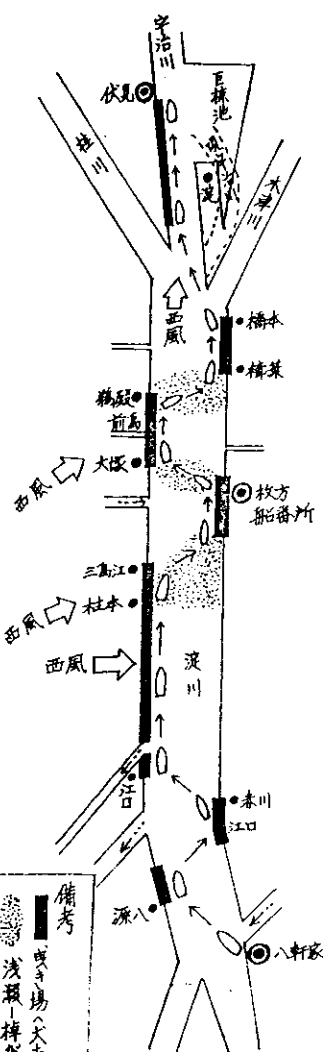
この一行との交流は当時の文化発展への影響を残してくれました。彼らの来日は随分華やかなものでした。慶長十二年（一六〇七年）以来、十二回の来日があり、寛永十三年（一六三五年）から幕末まで新將軍就任の祝賀使節として、九回の通信使が海を渡ってきています。

一行は四〇〇人から五〇〇人近い大人数でやってきます。その諸経費は通行沿岸道の大名の負担になっていたから、競って派手になり、豪華になっていきました。

この接待は国役で、一国単位に課せられる夫役（労働課役）で、このころは貨幣納となっていました。堤防の修理や上り船の綱引道の補修、船筋の浚渫など、数ヶ月も前からの準備が大変でした。夜間ともなれば、綱引道を提灯・松明で照らす手間もいりました。そのうえ綱引人足、つまり船を網で曳きあげる人足は、沿村の人たちの義務でした。そのことから、鳥養の村々の人々も徴集されました。

「淀川」松籟社・「摂津市史」より

担当 (茗荷)



上り船曳きあげコース
「淀川案内」
宇津木文化研究所編

考古学雑誌

第30回

摂津市と水田の考古学

摂津市域の条里制

「条里原点石の調査」(二)

(前号から続く。)

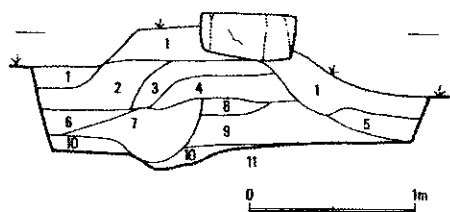
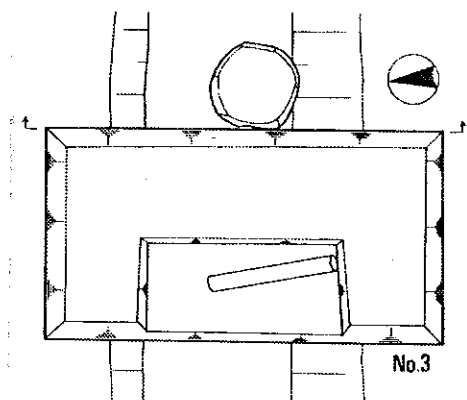
No.2は直径約六十センチ、厚さ約三十センチの円形柱形で、畦畔上に置かれた状況でした。畦畔は耕土を盛って形成されていました。No.2坪境石の直下にはこぶし大以下の礫・瓦片などが敷かれていました。このような状況から、この石は、現在の状態に置かれたのは、ごく最近のことと判断されます。

No.3は直径約六十センチ、厚さ約三十センチの円形柱形で、畦畔の表土に下半部が埋もれた状況でした。断面観察の結果は、畦畔の直のベースとなっている床土の上に置かれた状況でした。このような状況も、現在の状況に置かれた

のはさほど古い時代ではないと判断されます。

◎以上の状況から、この時の状態に置かれたのはそれほど古い時代ではなく、水田が当時のように整えられたのと同じ時期と判断されます。近世の末もしくは近代のころでしょうか。

しかし、この結果から、「坪境石」そのものが新しいと判断され



No.3 検出状況・平面図及び断面図



No.3 検出状況・断面写真

事ではありません。以前紹介したように地あげや土地改良のたびに設置しなおされた可能性があるからです。石自体に年号を含め銘文がありませんので時代の特定は困難ですが、古くさかのぼる可能性は残していると言えます。ここで問題になるのが、この地域でいつから水田開発が始まったかという事です。報告書ではNo.3地点の古い畦畔から出土した遺物から、この地域の水田開発の始まりは中世頃ではないかと指摘しています。(つづく)

担当 (伊部)

大阪府文化財調査速報・第三十八号
『節・香・仙』一九八三年三月より

【ほ】方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)
○弥生時代・古墳時代の墓の二形式。中央に遺骸を納める土坑を掘り、その回りを方形にして溝をめぐらします。○一辺六〜七メートルあるいは十メートル前後で、溝に内部と接続して狭い土
あ
からにはる古学
区画内は方形高く盛土もあり地で見え
ており、弥生時代から古墳時代へと続きます。古墳時代においては、巨大な前方後円墳が發展しているとき、前代からの伝統をもつ墓制が継続されるなど被葬者を含め研究の課題は多いと言えます。